

# 確かな学力を育成する日常授業の改善

～ ICT の効果的活用で「わかる」授業をつくる～

新保元康 研究代表者

金山真由美 中屋賢一 佐野浩志 佐藤琴美 菅野牧子 栗原聡太郎

## 要約

本研究は、直接的には「ICTの効果的活用で「わかる」授業をつくることを目指す。つまり、このことが、結果として各教科の日常の授業改善を促し、ひいては、児童の学力向上を目指すものとなるという立場をとる。

団塊の世代が引退期を迎え、教師の世帯交代が急速に進みつつある。ところが、次世代を担う若手教師は、「知識を明解に教える力の不足」という大きな問題を抱えている。

新学習指導要領は、時数増を超える内容の大幅な増加を予定しており、さらに、これまで以上に学力の確実な向上を求めている。つまり、効率的で内容豊かな指導を求めているのである。

説明力の不足した教師では、この新学習指導要領の要求に応えることは極めて難しい。

ベテランの「技」をどう若手に継承するか、そして、若い世代の特質を活かした説明力をどう育てるべきか...このような問題意識から研究をスタートした。

この問題意識を解決するために「指導法の改善」「学習規律の改善」「研究方法の改善」という3つの改善の柱を元にしてICTの効果的活用を軸に研究を進めた。その結果、以下のような成果を得ることができた。

第一に、ICT機器を利用した明解で効率的な説明力の向上である。

若手教師の強みは、ICT機器への抵抗感が少ないことである。そして、言うまでもなく、ICT機器は、教師が知識を分かりやすく効率的に説明する際の道具として優れている。「指導法の改善」を通して、子どもに分かりやすい短い言葉での効率的な説明力の向上が見られた。さらに「学習規律の改善」を研究に組み合わせることにより、ICTの効果的活用を生かした説明力の向上が見られた。

第二に、ベテラン教師と若手教師の協働による説明力の向上である。

学校はベテラン教師という大きな教育資産を活かさなくてはならない。ベテラン教師には、いつの時代にも陳腐化しない、普遍の説明技術を持っている。しかしながら、ICT機器への抵抗感は大きい。そこで、若手がICT活用技術をベテランに教え、ベテランが熟練の技を若手に伝える協働的な研究を創り出す。互いの良さを交流する新たな研修システムを「研究方法の改善」を通して開発した。その研修システムが授業道場であり、ミニセミナーである。

短い時間で、若手が、ベテランにICT機器を使った授業イメージを伝える。実際の授業場面ではベテランが普遍の説明技術を若手に伝えるという双方向の研修システムを活用したことによりベテラン教師と若手教師のICTを活用した説明力の向上が見られた。

---

代表者勤務校：札幌市立山の手南小学校

今年度（平成 23 年度）より小学校において新学習指導要領が全面实施された。

今回の改定はこれまでとは違い、学習内容が大幅に増えたことが大きなニュースとしてたびたび取り上げられている。

連日のように、取り上げられるニュースからは、「子どもたちに確実に学力をつけていく授業が求められている」ということが浮き彫りになる。

一方、教師には、様々な業務が津波のように押し寄せている。児童の安全確保、特別支援を必要とする児童へのきめ細やかな対応、保護者との丁寧なコミュニケーション、多岐にわたる各種調査への対応など業務は拡大し続けているのである。

そのため、授業改善のために振り向ける時間は相対的に年々減少を強いられているのではないだろうか？

言うまでもなく、よりよい授業の提供は我々の最大の仕事である。限られた時間の中で、いかに効率的に研究をすすめ、授業を改善していけばよいのか。これは、非常に大きな課題である。

このような時代背景の中にあって、私たちの研究推進も改善が求められている。私たちは本助成を受けるにあたって、効果的に子どもたちの学力をあげ、効率的に研究を進めるためにどのように ICT を活用し、授業を改善していくことが望ましいのか考え、これまでの自分たちの研究を見直し、研究主題を次のように設定した。

## 研究主題

**ICT を活用して子どもに明快に説明する力を持つ教師の育成**  
**～確かな学力を育成する日常授業の改善～**

本校では、長年に渡り多くの授業実践を積み上げてきた。貴重な成果、研究財産が蓄積している。しかし、その成果を日常の授業に生かしきれていないのではないかという悩みがあった。

素晴らしい研究授業があっても、それはなかなかまねすることができない名人芸であることが多かった。日常の授業に生かすことのできない大がかりな授業も本校ではよくあった。素晴らしい授業を生み出すコツが見えない…。まねしたいけれども、どこをどのようにまねしたらよいのかわからないということも多かった。

また、これまでの研究は、素晴らしい授業を行うために、何度も話し合いを繰り返し、深夜まで多くの時間をかけてきた。もちろんそれは、多くの成果を挙げ、教師の授業力向上を支えてきた。しかし、一時間の授業のために大きな労力と多くの時間を費やしてきたことも事実である。

そこで、我々は、研究授業という一時間の特別な授業のために研究をするのではなく、日常の授業の質を向上させ、授業を改善することを目指した。そうすることによって、今まで以上に時間を有効に使い、効果的・効率的に確かな学力を育成することができると考えたのである。

研究の焦点を「日常授業の改善」に当て、さらに、その改善を「ICTを活用して、どのように明解に説明するか」という事に焦点化することにより、毎日の授業に研究の成果が生かされ、教師も子どもも授業の改善を日々実感できるようになると考えた。

日常授業への焦点化という視点から、これまでの研究を振り返ると、本校教師からは以下のような問題意識が挙げられた。

- ・ 教師の思い込みで教えていないか？
- ・ 教科書を十分に活用して教えているか？
- ・ 密度の薄い授業になっていないか？
- ・ 教師は必要なときに積極的に、的確に説明しているか？
- ・ 楽しい授業は子どもを笑わせればよいと思っていないか？
- ・ ノートへの書く量が不足していないか？
- ・ 無目的に子どもにゆだねていないか？
- ・ 結局、同じ子ばかりが発表する授業になっていないか？
- ・ 授業づくりは「座って、唸って、時間かかって」になっていないか？
- ・ 子どもに変容を起こす授業になっているか？

このような問題意識から、我々が見直すべき点は日常授業の改善であり、そのために ICT を活用して子どもに明解に説明する力をつける研究をすることが必要であること、それらを解決するために指導法、学習規律、研究方法の改善が必要であることが共通理解されてきた。

日常授業の改善に大きな役割を果たすのがICTである。

本校では、玉川大学堀田龍也准教授のご指導の下、普通教室に実物投影机とプロジェクタを導入し、活用している。パソコン教室だけではなく、一般教室での活用を推進しているのである。

実物投影机とプロジェクタは、専門的な知識や特別な技能がなくても、極めて操作しやすい。そして、授業が非常にわかりやすく、効率的になるのである。

これらの機器を本校では主に次のように活用している。

### 教材や資料等を大きく映す

極めて単純なことである。

しかし、40人の子どもが一つの大きな資料を一緒に見ながら進める授業がどれほどわかりやすいものであるのかは、多くの教師に直感のご理解いただけるだろう。

しかも、特別に準備をすることなく、大きく見せたいと思ったときにいつでもできるのである。

具体的な場面を紹介する。

- ・国語の教科書を大きく写し、新出漢字の読み方を確認しながら読む。
- ・原稿用紙を映して、作文の書き方を教える。
- ・分度器を大きく映し、角度のはかり方を教える。
- ・社会科の教科書の写真を実物投影机で大きく映し学習問題を共有する。
- ・グラフを提示し、着眼点を赤ペンで囲んで示す。
- ・ノートにかいた図を拡大し、自分の考えを説明する。
- ・実際の花を拡大し、おしべやめしべの構造を教える。
- ・理科の実験セットの組み立て方を、部品を拡大しながら教える。
- ・彫刻刀の使い方を、教師の手元を映しながら教える。

日常的な活用場面が次々と目に浮かぶことと思う。



手元を映す

大きく映す、そして、同じものをみんなで見る。これだけで授業は格段にわかりやすくなるのである。

私たちはICT活用のために、これまでの授業を大きく変える必要があるとは考えていない。これまでの日常授業をサポートするのがICTなのであると捉えている。



ノートを映す

日常の授業を気軽によりわかりやすいものに変える。我々は、これまでの板書を中心に展開する一斉学習に自信をもち、日本の教師のお家芸とも言える一斉授業に、必要なときに必要なだけICTを利用するというのが本校の考え方なのである。

さらに、本校では、全教室にパソコンを配置し、次のようなトライアルを始めている。

- ・フラッシュ型教材の活用
- ・デジタル版英語ノートの活用
- ・番組やクリップなど、デジタル教材の利用
- ・札幌市教委サーバーにあるデジタルコンテンツの利用

実物投影机とプロジェクタでICT活用を始めた教師たちは、ICTを気軽に活用するようになってきている。そして、上記のようなパソコン利用の授業にも取り組むようになるのである。本校では、教科・学年別に分けた教材共有システムの構築にも着手した。

サーバーに、自作のデジタル教材を共有し、教室の端末でいつでもすぐに利用できるようにしたのである。

このように日常授業でICTを気軽に使うことで、よりわかりやすい授業を実現し、確かな学力の向上を図ろうとしている。それを全教室で行うことを目指し、ICT機器の整備や活用の推進を研究部とICTコーディネーターとが連携を図りながら取り組んでいる。



#### 4・「指導法の改善」

本研究では、日常授業の改善を通して、ICTを活用して、子どもに明快に説明する力を持つ教師の育成をめざした。ICTを活用した授業に取り組むことで、今までの発問や説明がより明確になり、板書がさらに構造的になり、授業展開のテンポがよくなると考えて実践を積んできたのである。ICTを導入するためにこれまでの授業構造を大きく変化させるのではない。ICTを活用して、効果的な説明力を得ることが日常授業の改善の近道であり、そして、その日常授業の改善がさらにICTを活用して明解に説明する力を持つ教師を育成するというようにスパイラルに高まっていくととらえている。

そこで日常授業の改善を通して、子どもに明解に説明する力を教師が持つことができるように「指導法の改善」、「学習規律の改善」、「研究方法の改善という」3つの視点についてICTの活用を考慮しながら進めていくようにした。次項からはその3つの改善の具体について述べていくこととする。

「指導法の改善」については4つの視点を設けた。

- 4・1 発問の吟味・効果的説明
- 4・2 板書の改善
- 4・3 授業展開の改善
- 4・4 教科書をどう使うか

具体的な思考を促す  
発問、説明

#### 4・1 発問の吟味・効果的説明

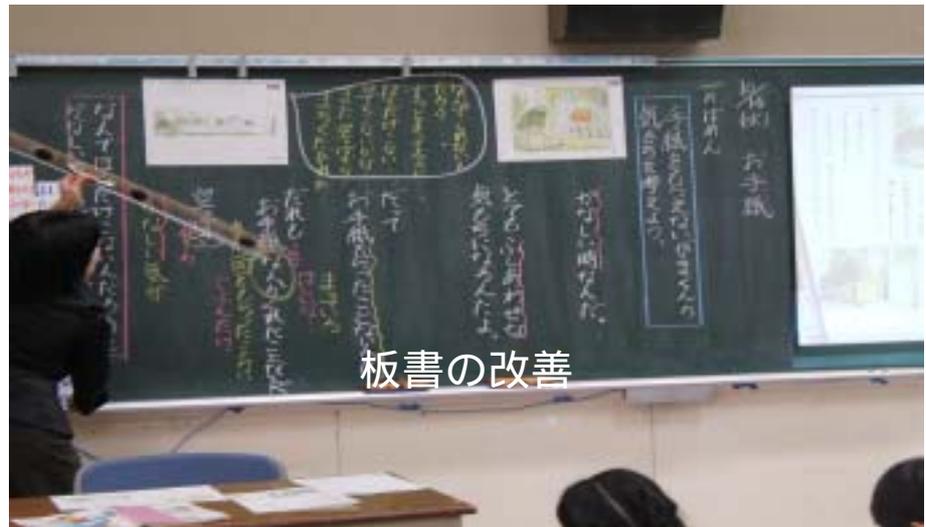
発問や説明は授業の中で教師の発する言葉の大部分を占める。今回の研究を進めるにあたって「無駄な説明がないか」「無用な発問が多くないか」を十分に吟味した。今まではどちらかという教師の無駄な発問や、無駄な説明で子どもの理解が妨げられたり、習熟や活用の時間が十分に確保できなかつたりすることもないとは言えなかった。また、授業の流れが停滞したときに困った教師が無目的に子どもに発言を求めたり、子どもの思考の流れに配慮せずに教師の意図に無理矢理導こうとしたりすることもあった。こうした反省から教師の発する言葉を日常的に吟味することにした。発問や説明の言葉を吟味することは子どもに伝わりやすい言葉を選ぶことである。教師の意図が明確な発問をすることにより、誤解を招く表現や、言い換えが必要な発問が減ると、子どもがスムーズに課題を把握し、次なる学習活動へ移ることができる。我々は、まず短い言葉で端的に話す習慣をつけること

を目指している。短くわかりやすい言葉、目的に合った言葉の吟味を日常的に意識して実践することの意味は大きい。

#### 4・2 板書の改善

「流れ」ではなく「構造」を意識した板書

板書は、学習の流れを表すことができたり、学習内容を構造化して表したりすることができる。板書の構造を意識することは学習内容を整理



し、児童の理解や学習活動の向上を図り、授業改善を図る上で大きなウエイトを占める。

日常授業でこのような構造的な板書ができれば、学習内容のイメージが確かなものとなり、習得や活用に生きる授業づくりとなる。

具体的取組としては、板書案を指導案に位置付けたり、板書に学習課題やまとめをできる限り明確に位置付けたりすることとした。また、



ICTとの併用で、より具体的な発問、説明ができる。

校内で授業を見合うときには板書を話し合いの資料にすることにした。このような取組を継続することで日常の授業改善に結び付くと考えている。

また、黒板の中にマグネット式スクリーンが配置される場合や、50インチスクリーンとの併用もあり、ICTと板書の効果的な併用を目指して実践を積んできた。



#### 4・3 授業展開の改善

これまでの授業の中で、子どもの自主性を重んずるあまりに、いつまでも子どもの挙手を待ち続けたり、焦った教師が発問を繰り返したりすることが課題として挙げられた。楽しい授業にしようとするあまり、笑わせることが目的のようになっていたり、教師の意図に引き込もうとしたり、一方的な教え込みになりがちな反省もあった。このような授業では学習内容を理解させるために、結果的に時間が多くかかってしまった。これでは、学習内容が大幅に増えた新学習指導要領に対応できない。そこで次のように45分の授業時間の見直しを図った。

**考えさせるだけでなく、必要な説明の時間の確保**  
**習熟の時間の確保**  
**教師の言葉の厳選**  
**場面に応じた適切な指示**  
**ICTを活用した効率的な説明**

### 3つの場から授業展開の改善を

このように具体的に見直す視点を設定することで、45分の授業時間が中身の濃いものになってきたと考えている。授業のテンポがよくなり、早く進む分だけ、子どもの考える時間、体験や活動する時間も生み出せるようになりつつある。

さらに平成22年度からは授業全体の構造を見直し、実践を深めた。

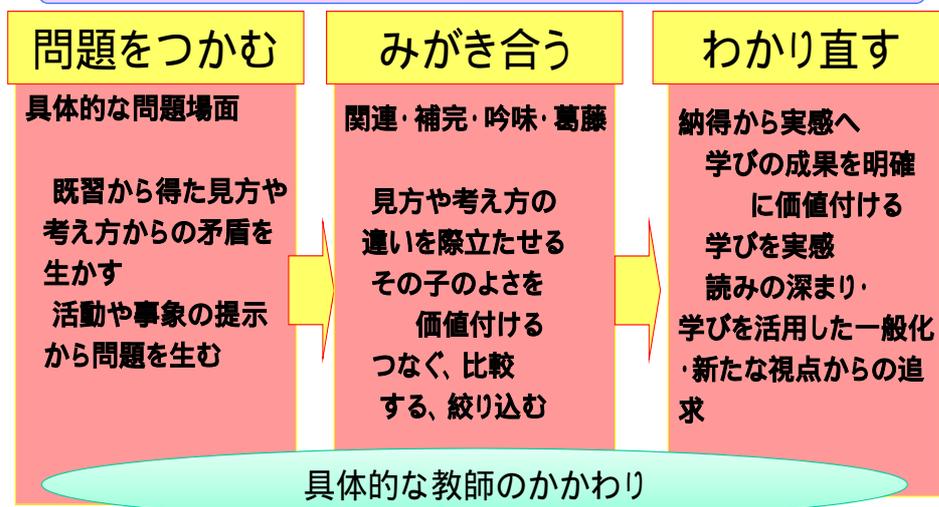
平成21年度同様に発問、説明にかかる言葉の厳選という具体的な教師のかかわりを大事にした上で、子供の意識の流れに沿った3つの場づくりから「授業展開の改善」を図りたいと考えた。

<http://www.yamanoteminami-e.sapporo-c.ed.jp/>

## 視点1

### 心のゆれを学びに生かす授業展開

#### 3つの場から学びを構築する



この3つの場はそれぞれが時系列で区切られたものではない。学習目標との関連からそれぞれの場が構成されることが重要である。

それぞれの場は単に手立てを打つ場ではなく、教材の本質や、学習指導要領のねらい、単元の目標、本時の学習目標と密接に関連する場として考えている。

### 問題をつかむ場

まずはじめに、子供たちが問題をつかむ場の構成が非常に重要になる。問題をつかむ場では、「異なる事象や事実の比較」「生活経験や既習との矛盾」「子供の目的を妨げる事象や事実の提示」などをICTを活用して行い、問題意識を醸成させて、子どもに問題をつかませる。

## みがき合う場

ICTを活用して、教科書の資料を大きく見せたり、比較が見えやすいように資料を提示したりすることで、説明の言葉の吟味が行われる。提示する事象や、具体物などの吟味と厳選を行い、手立てを徹底して具体化することが大切になってくる。

子供たちは問題をつかむことができれば多様な追求を始める。自分の考えと友達の考えを関連付けたり、補完したりしながら目標に向かって追求を進める。

その際に板書構成や、子供の発言の引出し方などを工夫することで子供の多様な見方や考え方の違いを際立たせ、その子のよさを価値付ける。

ICTを活用して、子ども同士が自分の学びを説明していくことも考えられる。教師の指示や、説明も「関連」「補完」「吟味」「葛藤」を引き出すように具体的に、厳選して行われる必要がある。

## 分かり直す場

子供たち同士で納得した「分かり」を実感を伴ったより深い「分かり」にすることができるように教師が具体的な手立てを図る。追求の角度や視点を変える新しい事象の提示をしたり、「コツ」を目に見える形に変換したり、矛盾を突きつけ不足を明らかにしたりする手立てから、自分たちの「分かり」がより深まったことが「実感」できるようにする。子供たちが一面的、自分本位に「分かった」と思っていたことを分かり直すことができるようにするのである。

これらの手立てはICTを活用すると、コンパクトで子どもの理解を深める具体的なものとなることはいうまでもない。言葉を短くして、発問や指示を厳選したうえで、さらに視覚に訴えることができるICTの活用は子どもたちの分かりを助けるものとなった。

## それぞれの場で、教師のかかわりが具体的に

3つの場から授業展開の改善を図ることで、それぞれの場で、教師がすべきかかわりを具体的に考える事につながった。

一つ一つの場の意味を考えながら、発問や、説明を具体的に考え、さらにそのかかわりの中にICTをどのように活用するのかを考えていくことで、より短い言葉で、より具体的な発問で、具体的に学びを進めることができるようになったのである。これにより、漫然と45分を流すことがなくなり、学習の進め方にもメリハリが生まれた。

#### 4・4 教科書をどう使うか

2年次目からは「教科書をどう使うか」視点も付け加え、研究を進めた。

そのままつかう  
不足を補う  
抜き出して使う

<http://www.yamanotemini.nami-esapporo-c.e.d.jp/>

### ～教科書をどう使うか～

#### そのまま使う

教科書通りの  
順序・順番で  
教科書の  
写真・挿絵を  
そのまま

#### 不足を補って使う

教科書の記述  
の不足を  
教科書の事象  
の不足を  
教科書の図、  
写真、挿絵の  
不足を

#### 抜き出して使う

教科書の一部分  
をクローズ  
アップして。  
教科書の写真

### 教科書の「記述」へのこだわり

は、なぜこの問題なのか、なぜこの言葉を使っているのか、なぜこの資料が載せられているのか、それらの教科書の「記述」にこだわり、一時間の授業をつくることに取り組んだ。

ここでもICTを活用して、教科書の一部分を大きく写したり、教科書の文言で足りない部分を考え付け加えて提示したりすることが有効だということが確認された。

日常授業の改善を考えた場合教科書をどう読み解くかという事が重要になる。教科書に例示されている問題



第2の改善点は学習規律の改善である。

本校ではこれまで、学習に向かう子どもの構えや学習規律については、全て各学級担任の指導にゆだねられていた。それぞれの教師が思い思いに学習ルールを作って指導してきたのである。

今回の研究で、我々は個々の教師に任されてきた学習規律について交流し、授業の効率をあげるために全校で取り組む一定の基準を設けることにした。

例えば、机の上に用意されている文房具が不揃いでは、教師がその都度何を使うか指示しなければならず、道具を揃えるだけで時間がかかってしまう。

ノートも、使い方のルールがはっきりしていなければ、あっという間に学習効果の低下を招く。上記の板書の改善と合わせてノート指導と一体となった授業改善を進めていくことにより、ノート指導の充実が飛躍的に向上するものとする。

そのため、本校では、ノートの書き方、筆記用具の全校統一、授業に向かう姿勢への配慮など学習規律の向上に取り組んだ。

### 5・1 ノート指導

小見出しをつける。

- ・日付
- ・教科書のページ
- ・問題番号
- ・学習内容の小見出し

等をノートの左端に線を引いて書き込むこととした。

定規を用意し、線は全て定規を使う。

- ・10cm～15cmの定規を揃える
- ・机上は、教科書、ノート、鉛筆、定規を基本に置く。

ICTをノート指導に生かす事で授業改善

これらの指導により、ノートは見やすくすっきりしたものとなった。

この、ノート指導でも、具体的なノートの使い方をICTを活用して見せたり、見本となるノートの提示



を行う事で、子どもたちのノートが見やすいものになっていった。今までのノート指導では、学級全体のノートの取り方をそろえることにとても苦労していたが、ICTを活用することで、短い言葉で説明して、端的に子どもたちに理解させることが可能となった。



## 5・2 机上整理などの学習環境

ノート指導と同時に机上を整理して授業に向かう意識付けを図った。机上に教科書、ノート、筆記用具などが整然と並ぶ。筆記用具を統一することで子どもたちの中に、「学び方」が浸透してきた。

毎年似たようでちょっと違う指導を繰り返す必要がなくなる  
ことの意味は大きい



学年が変わっても  
全校同じことの意味

## 教室掲示から見る学び方



学習規律の改善の3つめは話し方聞き方の指導を全校で共通理解することである。

教師の説明力を上げることと、学び方の定着、確立はセットで行われるべきものと考えて、平成22年度には各学級、学年で話し方、聞き方に代表される学び方に力を入れて子どもたちを鍛える事を共通理解して取り組んだ。

どれだけ教師が言葉を厳選し、効果的な説明、具体的な発問を心がけたとしても、子どもたちの側に学び方が確立していなければ、その効果は半減すると考えたのである。

研究部で、各学級の話し方、聞き方に関する教室掲示を交流する機会を頻繁にとった。また、各学年では学年研修の際にそれぞれの学級のよさを交流することについても進めた。

研究全体会での交流では、ここでもICTの活用が効果的であった。写真を撮って、並べて提示することで、学年ごとの発達段階も見え、学校全体でどのように指導していくと効果的なのかかんがえることができた。また、ベテランや指導的立場にある教師たちのクラスの掲示を見ながら、若手の教師は、自分たちが気づかない「ちょっとしたコツの差異」について教えてもらうことも可能となる。学級の学び方の差は、この「ちょっとした」ことにあり、それを見ることで自分たちの指導にすぐに活かしていく姿が見られた。

ベテランと若手の指導技術をつなぐICT

## 6・研究方法の改善

「研究方法の改善」について6つの視点を設けた。

- 6・1 授業道場の推進
- 6・2 授業評価シートの導入
- 6・3 授業参観考察
- 6・4 模擬授業の推進
- 6・5 指導案の改善
- 6・6 教科研究・学年研究の融合

### 6・1 授業道場の推進

かつて、放課後の日常的な雑談の中で若手教師はベテラン教師から指導技術を学ぶ機会が多かった。そのような気軽な交流の場を日常の中に設けたいという願いがあった。気軽に授業を見せ合い、授業力の向上を目指そうと始められた取組である。

「授業道場」のメリットは次の3点である。

#### ベテランと若手の小さな授業技術に関する情報交換の活性化

#### 日常の授業でトライアルする小さな改善の検証

#### 気軽に授業を見合う、研究の日常化と効率化

この「授業道場」により、子どもの知識習得に有効なわかりやすい説明の方法、思考の流れが整理される板書技術など、ベテラン教師がもつ「熟練の技」を若手教師が間近に学ぶことができる。一方若手教師はICT機器の操作技術などをベテラン教師に伝えることができる。このように若手とベテランの活発な交流が個々の教師の授業力向上につながる。

「授業道場」は45分の授業公開を前提にしていない。場面を限定した10分の公開も可能である。これにより授業者は指導案づくりに過剰な時間をかける必要がなく、指導法の改善に向けた小さなチャレンジを評価してもらうことができる。

#### 授業道場のシステム

授業を公開する教師は当日の朝までに連絡。  
授業公開  
参観する教師は10分程度の参観でもOK。  
授業後、板書と授業評価シートをもとに、希望者による短時間の話し合いをもつ。

「いつでも、何度でも」のミニ研修型授業道場

### ミニ研修型

#### 授業道場

テーマは、学級作りや、教科の指導法など何でもよい。

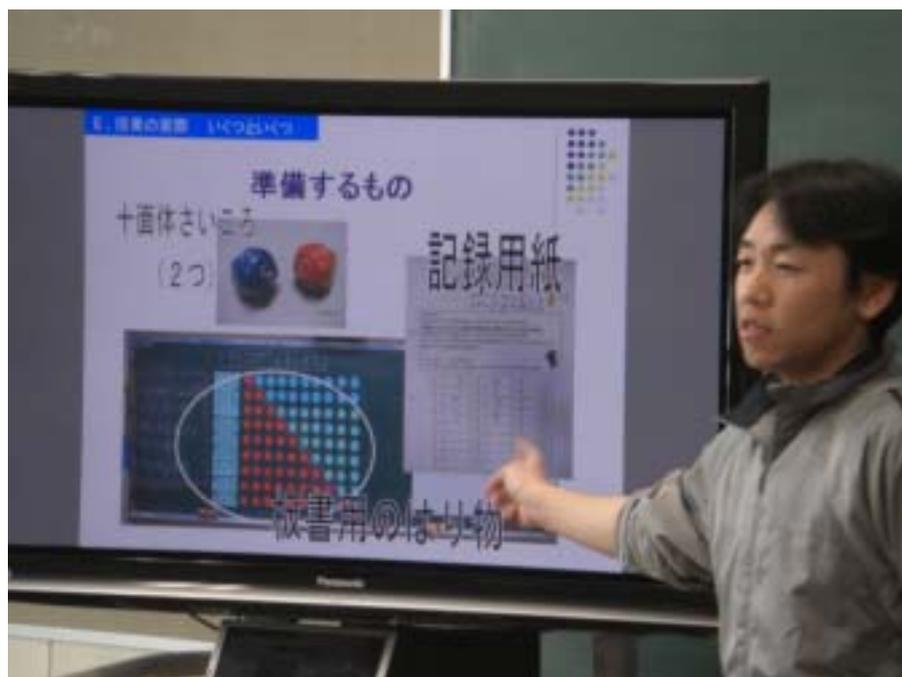
一回のセミナーは20分程度

参加自由

参観する側も「授業の導入場面 10 分だけ」「授業をまとめる場面」と見たい場面を選んで見ることができる。

「授業道場」後は板書の記録を残し、授業評価カードを参考にしながら短い時間で話し合いをもつことにした。平成21年度はこの授業道場を100回以上行い、授業を見合い、見せ合いながら切磋琢磨することができた。

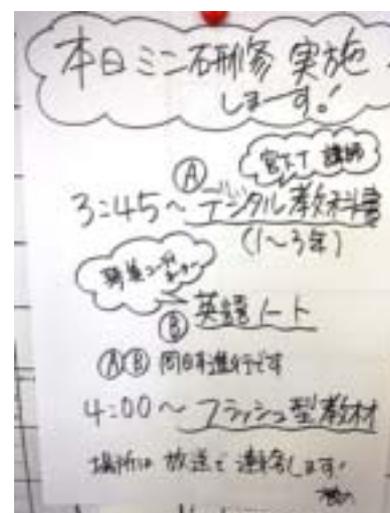
平成22年度からはこの授業道場の考え方に加えて、学び方や、指導技術に関するミニセミナー的な授業道場も行った。



ミニ研修型の授業道場では、講師役の教師が普段実践している教科の指導法や、子どもをどのように鍛えるかという事などを20分程度にまとめ、発表する形をとった。ベテランの教師がどのようにして子どもたちを鍛え、子どもたちの見方や考え方を高めているのかを若手に伝える協働的な研究を作り出すことができた。

同じ教科書を使い、同じように流していてもちょっとした説明の違い、ICTの使い方の違いにより、子どもの分かりが大きく違うことが分かることは、若手の教師にとっておおきな意味を持つ研修となる。

また、一回あたり20分という短い時間でのミニ研修型の研修を「いつでも、何度でも」行う事で無理なく研修に参加することができるような場作りができた。この「いつでも、何度でも」のミニ研修型の研修スタイルもまた、効果を上げるひとつの要因となった。



## 6・2 授業評価シートの導入

本校の授業研究は、研究授業を行い、長時間の話し合いを要したが、「成果と課題が明確にならない」という課題があった。

そこで、宮城県登米市立北方小学校の取組を参考に「授業評価シート」を利用することとした。

授業評価シート		
授業クラス	日	教科
1	授業の目的が明確であるか	
2	授業の進め方が適切であるか	
3	授業の進め方がわかりやすいか	
4	授業の進め方が興味を引くか	
5	授業の進め方が学習意欲を高めるか	
6	授業の進め方が学習成果につながるか	
7	授業の進め方が学習態度を高めるか	
8	授業の進め方が学習習慣を身につかせるか	

授業改善が、どの項目でどの程度達成されたのかを数値で評価し、成果と課題が見えるものとするを旨としたのである。

この授業評価シートには次のようなメリットがある。

**授業改善の観点が明確になる。**

**授業参観時の視点が明確になる。**

**授業のどの部分がよかったのか、改善が必要なのかが明解になる。**

**このシートを元にすることで、話し合いが焦点化する。**

**短時間で授業反省ができる。**

評価シートの取り組みでは、  
、  
の効果は大きく上がったが、  
の改善点や、よかった部分の評価についてはなかなか数値に表れない部分も大きいという声実践者から多くあげられた。そこで、2年次目の研究からは評価シート授業評価シートの考え方は生かしつつ、それぞれの授業をしっかりと見て、授業参観考察を書き、研究の評価とすることにした。

## 6・3 授業参観考察

2年次目の研究ではとくに、1時間の授業のイメージを全員で共通理解することを大切にしたい。そこで、短時間の授業参観で評価シートを書くのではなく、一時間の流れの中でしっかりと子どもの分かりについて考え、考察を書くことに取り組んだ。

この授業参観考察は、一人A4一枚で、その日の授業を評価し、改善点をあげて行くものである。参観考察は、研究部でまとめて印刷し、

全員に配付する。同じ授業を見ていたにもかかわらず、全く違う見方をしていることがわかったり、自分が気づかないような部分が指摘されている考察を見ることで、授業の見方がどんどん高まり、授業技術を上げるための一助となったことが年度末に行った研究評価の文面から読み取れた。

#### 4点満点評価 平均3.55点

文章記述の方が自由に改善策なども書いてよい。

締め切りまでの期間もよく、勉強になりました。

授業全体を見て、記述式という形式はいろいろな観点から、主題にせまることができよかったと思います。

授業者にとっても見せてもらった側にとっても、力量を上げることにつながると思った。

#### 6・4 模擬授業の推進

今回の研究では模擬授業を積極的に取り入れ、各教科部会の部会の時間を「指導案を練る場」から、「実際にやってみる場」へと変化させ、模擬授業中心で授業づくりを推進することにした。

教師が子ども役になり、実際の資料を使い、本番と同じ発問を試みるのである。実際の授業をイメージすることで、机上の指導案づくりは、ぐっとリアルなものとなる。

その際にどのようにICTを活用して、どのように説明すると、子どももの分かりにつながるのか細部にわたって検討することができた。何度も何度も繰り返して検討を重ねることで、若手の教師にも説明力の向上が見られた。

#### 6・5 指導案の改善

これまでの指導案は、数ページに渡る枚数で、完成までにたいへんな時間と労力をかけてきた。長い文章をたくさんの時間をかけて書いた割には、焦点がぼけてしまい、結局本時で何を教えたかったのがよく分からない授業が多くなっていなかったかとの反省にたち、A4二枚で全ての指導案を書くことに取り組んだ。主張したい点が端的になり、何をどのように教えたいのかという事が明らかになった。

<b>6年社会</b>	世界の国々と共に生きて
3年次編 教科 社会科	3月2日(水) 2校時 10分5組

**1・研究の横軸について**

「情けは人のためならず」  
 ○教科書の内容から海外で活躍する日本人の有様に着目し、「日本の外交史として、日本の海外展開」として、戦後の平和と安全、繁栄のため、行動してきたと捉えている。  
 ○これは又上掲紙の教科書編行方式、「現代社会」を主題とし、その発展するなかで、日本の海外展開はどのような形で進んでいくのかを捉えていると捉えている。これは「現代社会」の発展するなかで、日本の海外展開はどのような形で進んでいくのかを捉えていると捉えている。

○この日本海外展開の背景から、世界のすべてに展開し、日本人の定住と関係して進んでいくことが、戦後の平和と安全、繁栄のため、行動してきたと捉えている。これは「現代社会」の発展するなかで、日本の海外展開はどのような形で進んでいくのかを捉えていると捉えている。

○この本時案は、「日本のため、世界のため」という目的で、よきと悪きとを区別して進んでいくことが、戦後の平和と安全、繁栄のため、行動してきたと捉えている。これは「現代社会」の発展するなかで、日本の海外展開はどのような形で進んでいくのかを捉えていると捉えている。

○この本時案は、「日本のため、世界のため」という目的で、よきと悪きとを区別して進んでいくことが、戦後の平和と安全、繁栄のため、行動してきたと捉えている。これは「現代社会」の発展するなかで、日本の海外展開はどのような形で進んでいくのかを捉えていると捉えている。

○この本時案は、「日本のため、世界のため」という目的で、よきと悪きとを区別して進んでいくことが、戦後の平和と安全、繁栄のため、行動してきたと捉えている。これは「現代社会」の発展するなかで、日本の海外展開はどのような形で進んでいくのかを捉えていると捉えている。

- 2・本時の目標**
- 本時案で扱っている問題について関心をもって読み進めようとしている。
  - 問題で扱われている日本人に関心を持ちその活動を知ろうとする。
  - 日本の国際協力、世界にとっての意義と、日本国にとっての意義の両方から考えることができる。
  - 国際交流活動について、自分なりに考えまとめることができる。
  - 問題解決に取り組み活動や、国際連帯の活動について調べたこととわが国とのかかわりがあることとをまとめる。
  - 日本の国際協力活動の意義だけでなく、日本が世界にも貢献しているということができる。

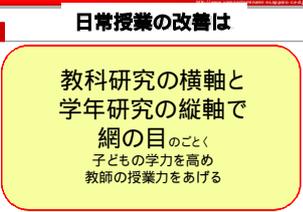
**3・単元構成**



<b>本時案</b>	本時4/6 日時10分5組 10分5組
<b>「情けは人のためならず」を実感する</b>	
本時の目標	日本の国際協力を、日本にとっての意義と、日本国にとっての意義の両方から考える中から、授業にわたっての日本の地位や、互恵安心を得るために必要なことであると考えることができる。
本時の学習活動	<p>世界の美しい国々</p> <p>世界の発展を守るために</p> <p>相互理解</p> <p>国際協力の意義</p> <p>平和の発展と平和を守るために</p> <p>世界の平和を実現するために</p>
教師のかかわり	<p>○日本の国際協力を世界中の人々に広げたいという考えや、日本国にとっての意義や、互恵安心を得るために必要なことであると考えることができる。</p> <p>○日本の国際協力を世界中の人々に広げたいという考えや、日本国にとっての意義や、互恵安心を得るために必要なことであると考えることができる。</p> <p>○日本の国際協力を世界中の人々に広げたいという考えや、日本国にとっての意義や、互恵安心を得るために必要なことであると考えることができる。</p>

**6・6 教科研究・学年研究の融合**

- 教科研究・学年研究**
- 教科研究**
- 国語低学年部会
  - 国語高学年部会
  - 算数低学年部会
  - 算数高学年部会
  - 社会科部会
  - ・各部会1本の全校研 + 全員の部内研授業
  - ・授業検討は教科部会
- 学年研究**
- ・各学年道徳の公開研
  - ・全員の授業公開
  - ・授業検討は学年



2年次目の研究では研究方法の改善の一環として教科研究・学年研究の両輪で授業公開を通して授業力を高めてきた。

教科部会では教科の特性を生かした「学ぶ力」はどう育てるべきかという事や、「教科書をどう使うか」という事を、全校研究授業

公開を通して共通理解することが目的であった。22年度の5月から11月に2本の研究部提案授業と5本の全校研を行い、さらに、全員が、部内での研究授業を公開した。部内研は部内での公開を前提としながらも、ほぼ全員が授業参観した授業も数多くみられた。

学年研究では、各学年で題材を選び、ひとつの授業を様々な角度から見て授業作りを行い、授業公開した。主に、板書や、発問、説明など、授業技術を高めるよい研究となった。1月から3月にかけて全ての学級で授業公開を行い検討することができた。

この2つの授業研を通して、教科を通して子どもを育て、さらに学年の発達段階を考えながら授業を組み立てる機会となった。

## 7・研究中間発表

本校は、研究の中間発表として、平成21年11月27日 第7回教育実践発表会を開催した。

### 1. 実践概要

- ・ 札幌市立山の手南小学校実践発表会
- ・ 札幌市学校研究委託事業研究モデル校実践発表会
- ・ 上月情報教育研究助成

### 2. 研究主題～副主題～

「確かな学力を育成する日常授業の改善～ICTの効果的活用でわかる授業をつくる～」

### 3. 研究主題背景

- ・ これまでの学校研究における問題意識から研究会のためでなく、**日常に目線をおいた授業改善**
- ・ 教師の研究から実践的研修へ。
- ・ 新学習指導要領に対応した授業作り（習得・活用・探求を明確に意識した授業）
- ・ ICTを使う上での、説明力、板書、発問、テンポ、規律...といった日常学習活動の改善
- ・ **ICTを全教室、職員室に導入した効果・効率的教育活動**

### 4. 本校が研究発表する上での意義

- ・ ICTを活用した日常授業の改善に焦点をあてた新たな研究スタイルの提案。
- ・ 札幌市での先導的・実験的な取り組み。（スクールニューディール政策の実施対応）
  - ・ 学習指導要領の改訂にいち早く対応した学校研究の発信。（習得・活用）全国学習状況調査テストの結果に対応した学校研究の発信。



### 5. 助言・講演

堀田龍也先生 玉川大学学術研究所准教授 / 文部科学省参与(生涯学習政策局参事官付情報教育担当)

山田健一先生 札幌市教育委員会指導主事

### 6. 堀田先生招聘の意義

- ・ ICTを活用した日常授業の改善の意義（教科書読解、授業技術）
- ・ 習得、活用、探求とは...新指完全実施に備えての学校での取り組みのポイント

## 7. パネルディスカッションの運営

- ・ コーディネーターは堀田龍也先生
- ・ パネリスト  
中井健司（本校研究部長）～札幌市のICT実践校として（授業）  
石黒正美（山室中部小）～全国でのICT先進校として  
山田健一（市教委指導主事）
- ・ テーマ「ICTの効果的活用でわかる授業をつくる」



## 8. 校務運営情報化部会について

- ・ 本校の職員室内ネットワークの説明  
主張点は「共有の文化」

校務共有フォルダ（NAS）の設定  
個人情報の完全管理  
グループウェア ジャストスマイルつたわるネット活用による会議  
スズキ教育ソフト活用による校務情報処理  
「教材共有ネットワーク」の紹介

### 8・まとめ

ICTの効果的活用を通して、確かな学力を育成する日常授業の改善に取り組んできた。道はまだ半ばであるが、教育実践発表会を通して、札幌市内はもとより、全道、全国の先生方に、本校の「日常授業の改善」というメッセージを届けられた。

3つの改善の柱のもと、ICTの効果的活用に焦点化し日常授業の改善を図ったことで様々な研修スタイルを開発することができた。

これらの研修スタイルは、本校のみならず他校での一般化にも大きく寄与するものである。

本助成で得た成果を元に、今後も研究を進めて行きたい。

研究協力者

堀田龍也先生 玉川大学大学院教育学研究科教職専攻 教授